

令和 5 年度卒業論文

大乘仏教・初期密教における陀羅尼の変遷

密教学科

20200505 金谷利治

まえがき

66歳で定年を迎えて退職したのち、高野山大学文学部密教学科に入学する機会を得て、この卒業論文を執筆することとなった。定年を迎えるまで、仏教とはほとんど無縁の生活をしてきたが、新たに学ぶ仏教やその思想は非常に興味深いものであった。66年間の間に培われた思想的「常識」と大きくかけ離れていたことで、戸惑うこともあったが新たな考えが広がる世界は魅力的で刺激的であった。

社会人コースに入学したものとして、卒業後も新たな就職の必要があるわけでもなく、勉学そのもののもの楽しいという状況で4年間の時を過ごした。本卒業論文は、特に新たな仏教の側面を切り拓いたわけではなく、学術論文としてはそれほど高いレベルにあるとは思えないし、またその内容が分野の常識を逸脱していることもあると思われる。定年を迎えたものとしては、新たな概念や思想を知ることや異なる分野の常識に出会えることが楽しく、その中で自身の学習のような卒業論文を書いたが、それをお認めいただいたことは感謝に耐えない。

今後、仏教を含めて新たな世界に出会えることを願いつつ、本論文の序としたい。

2024年1月
金谷利治
滋賀の自宅にて

目次

緒言	1
第1章 大乘仏教における陀羅尼	3
1.1 大乘仏教における陀羅尼の変遷	3
1.1.1 はじめに	3
1.1.2. 仏教発祥以前	3
1.1.3. 初期仏教、部派仏教における陀羅尼	3
1.1.4. 大乘仏教における陀羅尼	4
1.1.4.1 『般若経』の陀羅尼説	4
1.1.4.2 『法華経』の陀羅尼説	4
1.1.4.3 『華嚴経』の陀羅尼説	4
1.1.4.4 『大智度論』の陀羅尼説	5
1.1.4.5 『菩薩地』の陀羅尼説	5
1.1.5 密教における陀羅尼	7
1.1.6. おわりに	7
第2章 経典の変遷にみる初期密教の研究	9
2.1 はじめに	9
2.1.1 大塚による初期密教研究	9
2.2 『無量門微密持経』および類本の変遷	10
2.2.1 はじめに	10
2.2.2 『無量門微密持経』の構成	10
2.2.3 陀羅尼の密教的展開	11
2.2.4 儀軌の密教化	11
2.2.5 おわりに	12
2.3 『孔雀経』および類本の変遷	12
2.3.1 はじめに	12
2.3.2 『孔雀経』と類本の概要	12
2.3.3 『孔雀経』成立の理由	13
2.4 おわりに	14
付録 I. 大塚による初期密教経典の分類を行うための基準	15
付録 II 『仏説無量門微密持経』漢訳類本の訳者と訳出年代	15

付録 III 『孔雀經』 漢訳類本の訳者と訳出年代	15
第 3 章 社会的状況から見るヒンドゥー化とリターン現象	17
3.1 はじめに	17
3.2 グプタ朝とインド社会にみるヒンドゥー化	17
3.3 リターン現象	18
3.3.1 寄進碑銘中の願文	18
3.3.2 部派仏教の影響	18
3.3.3 経典にみるリターン現象	19
3.4 おわりに	20
第 4 章 現世利益の陀羅尼から成仏の陀羅尼へ	21
4.1 はじめに	21
4.2 松長有慶による研究	21
4.2.1 大乘経典における現世利益の呪文と成仏の陀羅尼の共存	21
4.2.2 陀羅尼と呪文の同化過程	22
4.2.2.1 成仏の陀羅尼を説く経典	22
4.2.2.2 一部分に除災を説く経典	22
4.2.2.3 増広で呪や陀羅尼を含む経典	22
4.2.2.4 『菩薩地』の四種陀羅尼	22
4.3 氏家覚勝による研究	23
4.3.1 研究方針	23
4.3.2 初期密教経典における同化過程	23
4.3.2.1 成仏・現世利益陀羅尼が独立の経典と準同化経典	23
4.3.2.2 同化過渡期の経典	24
4.3.2.3 同化した経典	24
4.4 『孔雀經』における陀羅尼の変遷	25
4.4.1 調査方法と結果	25
4.4.2 不空訳『仏母大孔雀明王經』の対応部分の内容確認	25
4.4.3 現世利益の呪文が成仏の呪文となる時	27
4.5 おわりに	28
まとめ	29
参考文献	31
謝辞	33

緒言

真言密教で唱えられる「ご真言」はいわゆる真言陀羅尼であり、密教の生命とまで言われる。古くは、陀羅尼と真言は別の起源をもち、それぞれ異なる意味を持っていた。陀羅尼は經典の句文およびその意味を覚えて記憶するものであり、それがダーラニー(dhāraṇī)という言葉が持つ原意である。一方、真言の起源は、古くはヴェーダの時代より存在する現世利益や除災招福を祈る呪文と考えられ、明呪(vidyā)、護呪(paritta)、真実語(satyavacana)、マントラ(mantra)などとして存在していた。それらが仏教にも取り込まれ、初期仏教、部派仏教、大乘仏教、密教の中で発展していく過程で意味を変え、また同化しながら変遷を重ねてきた。密教において真言陀羅尼はその成仏道である三密(意密、口密、身密)加持の一つであり、重要な意味を持っており、その変遷を見ていくことは密教形成過程を解き明かす意味においても不可欠である。

卒業論文(卒論)のテーマを考えた時点では、現世利益や除災招福を願う呪文がどのような過程で真言密教の成仏の真言陀羅尼に変遷してきたかの解明を最終目的として掲げた。しかし、卒論で取り扱うにはテーマが大きく、まず初期大乘から『菩薩地』¹までの陀羅尼の変遷に焦点を当て、『菩薩地』所説の四種陀羅尼の思想的背景を考察した。さらに初期密教期における經典の密教化とその社会的背景、さらには現世利益の陀羅尼から成仏の陀羅尼への変遷を追うこととした。

卒論の内容を簡単にまとめる。緒言に引き続き、第1章では、先学たちのこれまでの大乘仏教における陀羅尼の研究を代表的な大乘經論に沿って概観したのち、『菩薩地』四種陀羅尼、すなわち、法陀羅尼、義陀羅尼、呪陀羅尼、能得菩薩忍陀羅尼について考察した。第2章では、大塚の研究[2013]を基に、初期密教期における經典の密教化の過程を2つの經典『無量門微密持經』²とその類本や『孔雀經』³類本について、陀羅尼の増広・形式の進展や儀軌化の過程をまとめた。その進展の背景を明らかにするために、第3章では当時の社会的、政治的状況等について検討し、密教化過程の理解を深めた。しかし、陀羅尼の増広や儀軌化を中心にみたため、本卒論の主題である陀羅尼の変遷、すなわち、現世利益の陀羅尼がどのように成仏の陀羅尼に変わっていくかという視点は十分ではなかった。よって、第4章においては、現世利益の陀羅尼と成仏の陀羅尼の同化がどのように進んでいくのかについて、先行研究を基に概観して、同化の過程を明らかにした。さらに、『孔雀經』類本における陀羅尼の変遷を調べ、最初期では蛇毒を除く呪文(陀羅尼)であったものが、後代では煩惱を取り除く成仏の呪文(陀羅尼)として

¹『瑜伽師地論』は5つの組織から成り、そのうち『菩薩地』は17の地(階梯)から成る第1「本地分」の第15地であるが、ここでは独立經典のように扱い、特段注釈をつけない限り『菩薩地』で表記する。

² 大正蔵、Vol. 19、No. 1011

³ 大正蔵、Vol. 19、No. 982、『佛母大孔雀明王經』に代表される經典には類本が8つあるが、その総称として本稿では『孔雀經』を用いる。

も用いられていることを見出した。最後のまとめにおいて、本卒論を総括して今後の課題に言及した。

まだまだ、精査されていない考えであり、皆様からの批判と助言を期待している。

第1章 大乘仏教における陀羅尼

1.1 大乘仏教における陀羅尼の変遷

1.1.1 はじめに

真言密教においては、陀羅尼と真言は同一のものであると考えられており、便宜上比較的長いものを陀羅尼、比較的短いものを真言とする分類もあるが、明確な分類はない⁴。先学研究（平川 [1979]、梶尾 [1982]、頼富 [1989]、氏家 [1984] [1987]、生井 [1998]、北條 [1998]）の多くが、初期仏教、部派仏教から大乘仏教へ、さらに密教へと時代に沿って經典・論書の内容を基にして陀羅尼思想の変遷を追う形をとっている。密教については、初期密教（雑密）、中期密教（純密）そして後期密教（タントラ仏教）へと進むが、後期密教については、生理的行法、性的行法に重きが置かれるようになり、苦行・難行を伴う陀羅尼への比重が小さくなるため、その研究は多くなく、初期・中期密教における研究が中心となっているようである。これらの研究においては、思想的発展に注目しているものが多いが、実践を重んじる仏教において、陀羅尼が容易く修道へと導かれることは予想できる。その観点からなされている研究も多い。また、言語論、言語観的な視点から修道への陀羅尼研究も看過できない。これらに関しては、インド哲学諸派では神聖性に重点を置く言語論が多く、仏教では「字門」⁵を以って観想するという修道に注目しているものが多い。

1.1.2 仏教発祥以前

仏教発祥以前において、インドではすでに ヴェーダの宗教（バラモン教）が存在し、『リグヴェーダ』、『アタルヴァヴェーダ』等が編纂された。また土着の信仰も多くあった。仏陀の時代になるとヴェーダの宗教や思想の権威を否定した自由思想家達が現れ、仏陀やその他六師外道に代表される思想が展開された。それらの中で現世利益を求める多くの呪が唱えられていた。

1.1.3 初期仏教、部派仏教における陀羅尼

上述のようにヴェーダの時代から多くの呪文が唱えられており、それが仏教にも取り入れられた。しかし、初期仏教は理性的な宗教であり、仏陀の悟りは呪術とは関係がなかった。そのため仏陀はそれらの呪文は仏教の悟りには関係がないと否定するが⁶、

⁴ ヴェーダの時代のマントラ(mantra)も真言と訳されることも多く、本卒業論文では、大乘仏教までのマントラはマントラと記すことにする。

⁵ 梵字の1字1字に特殊な意味を与え、例えば阿(a)字は anutpāda の頭文字あるから阿字には anutpāda の語義である「本不生」が含まれているとするなどである。四十二字字門、五十二字門があり、修道に用いられた。

⁶ 大正蔵、Vol. 1、No. 26、『中阿含経』巻第47、724a

仏教徒にもすでに呪に慣れ親しんだ仏教以外の外道から入ってきたものが多くいたことや、当時の人々の心情を考え、護呪つまり治毒呪、治齒呪、腹痛呪などの善呪ならば仏道修行の妨げにはならないと考え、後に許した⁷。それにより、仏弟子の間に呪文が多く用いられ、仏教特有の明呪（呪文）もできて、次第に発達して大乘仏教の陀羅尼となったとの考えもあるが、まだ決着はついていない。

1.1.4. 大乘仏教における陀羅尼

1.1.4.1 「般若経」の陀羅尼説

初期大乘経典である「般若経」⁸を調査すると、『小品般若経』では、陀羅尼の記述はほとんど見られない。しかし、言語論の観点から見ると、すでに「字」という表現を取り上げ、視覚的な立場からこれに意義を追求し、ついには「字を菩薩となす」と述べ、菩薩の修行道に当てている。

一方、『大品般若経』では『小品般若経』とは異なり、陀羅尼を「無量の仏法を能く総持して忘失せざる念慧の力」と元来の意味が見られ、これを菩薩の徳目であるとしている。

言語論的には、大品系にあっては「四十二字陀羅尼門」が展開され、仏説としての言語の普遍的価値を追求している。これより言語論は行法の世界にその基盤を置いていることが分かる。そこでは、一字一語に一切万有が含まれるとされ、単なる心を統一する意味での陀羅尼ではなく、一字をもって実相を展開する。いわば悟りへの導きを含んだ陀羅尼をみることができる。

1.1.4.2 『法華経』⁹の陀羅尼説

鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』¹⁰を見ると、憶持としての陀羅尼と、呪文としての陀羅尼という二種の存在があり、陀羅尼の神秘的な威力を説く。第4章に述べるが、『妙法蓮華経』は呪文としての陀羅尼が現れるという意味では、大乘経典としては特別であるが、これは後の経典の増広によると考えられている(松長 [1998])。

『妙法蓮華経』においても、言語関係の記述は多く見受けられ、信仰的言語認識というよりも神秘的感応の機能を把握しようとしている(北条 [1998])。

1.1.4.3 『華嚴経』の陀羅尼説

言語論的には、『大方広仏華嚴経』¹¹では、「明法品」「十行品」「十地品」等にしばしば「ことば」を「ことば」として成立させる原理として、現象的声音と理念の実相

⁷ 大正蔵、Vol.2、No. 9、『雑阿含経』巻第9、61a-b

⁸ 最古層の大乘仏教経典群である。紀元前後から1世紀の半ばに成立したとされる『八千頌般若経』を『小品般若経』と呼び、鳩摩羅什訳『二万五千頌般若経』(大正蔵、No. 223)を『大品般若経』と呼ぶ。

⁹ 『法華経』は、本卒論では特に注釈がない限り鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』を指す。

¹⁰ 大正蔵、vol. 9、No. 262

¹¹ 大正蔵、vol. 9、No. 278

的観念という二重横造が示されている。これは後世に、字（ことば）は実相と字義の二重構造をとることにつながっている。

生井[1998]は成仏への大乘仏道体系のなかにどの様に密教的修行法が形成されていたかを扱い、陀羅尼の役割を菩薩修行の階梯との関係で読み解いている。例えば、「十地品」(=『十地経』)第九地で菩薩は利他へ向かうが、四無礙智、四無礙弁と連動し陀羅尼は衆生教化の重要な方便としての役割を担う。

やがて「入法界品」においては、財善童子によって示される「字門の直観によってことばの奥に潜む実相を感得し、ことばに依る悟りへの道」の話として確立する。

1.1.4.4『大智度論』の陀羅尼説

『大品般若経』の注釈書である『大智度論』巻五¹²に聞持陀羅尼、分別知陀羅尼、入音声陀羅尼の三種陀羅尼が説かれている。聞持陀羅尼は「耳に聞く所のものは忘れない陀羅尼」であり、分別知陀羅尼は「さまざまな事物の差別相を如実に覚知する陀羅尼」、入音声陀羅尼は「一切語言の音を聞いて喜ばず驕らず、悪言を言われ罵詈雑言を浴びせられても心に憎み、恨まない。諸法が不生不滅であり、その性が皆空なることを知る陀羅尼」である。さらに、巻二十八¹³では、字入門陀羅尼を説く。「阿字を聞いて、即時に一切法の初不生を知る。字門に従い一切諸法の實相を知る陀羅尼」である。後に『菩薩地』四種陀羅尼（法陀羅尼・義陀羅尼・呪陀羅尼・能得菩薩忍陀羅尼）¹⁴の原型となっているとの意見(北条 [1998])もあるが、検討が必要であろう。

1.1.4.5『菩薩地』の陀羅尼説

『菩薩地』においては、四種陀羅尼分類が登場してくる。これについては、「大乘仏教関係の論書で、陀羅尼について重要な言及をしているのは、『大智度論』と『瑜伽師地論』である」(頼富 [1989])とか、「無数の真言陀羅尼を瑜伽観法の上から統一したものが、かの無著の『瑜伽論』第四十五卷所説の法、義、呪、忍の四種陀羅尼である」(梅尾 [1982])などの意見が述べられ、『菩薩地』以前の経論で示されてきた種々の陀羅尼を整理・分類してまとめたものとの意見が多い。以下では、自利・利他および菩薩行の階梯の観点から考察を加え、四種陀羅尼について再度検討する。四種陀羅尼の現代訳については、梶山訳 [1979]を参照した。

菩薩行における自利・利他と階梯

部派仏教に比べ、利他に重点を置く大乘仏教においては、自身の悟りである自利と衆生救済である利他のバランスをどのように取っていくかは大きな問題である。金[2007]および相馬[1987]の論文にあるように、この2つの相違する考えが存在し、解決されないまま残っている。自利・利他を並行してバランスを取ることは容易ではなく、『十地経』に見られるような修行の階梯を設け、自利と利他を順次修習する仕組みが取り入れ

¹² 大蔵経、vol. 25、No. 1509、96a05-16

¹³ 大蔵経、vol. 25、No. 1509、268a25-29

¹⁴ 大蔵経、vol. 30、No. 1579、542c16-543b01

られている。『菩薩地』においても「住品」の十三住説のような形で現れる。このように、菩薩行において、自利と利他の修行方法は経論により異なり、並行、直列のどちらと決まっているわけではない。同様に陀羅尼においても、自利と利他の区別はそれほど明確ではないと考えることができる。

菩薩行における陀羅尼の役割

法陀羅尼と義陀羅尼は経典の句文およびその意味を覚えて記憶するものであり、ダーニー(dhāraṇī)という言葉が持つ原意が示されている。ここでは、菩薩が自身の修行のため経典を覚えて記憶するのであり、まずは自分の悟りのための自利の陀羅尼と考えられる。一方で、『十地経』の第七地で菩薩は空を悟り、第八地で不退転となり、第九地で四無礙智、四無礙弁と連動して法陀羅尼・義陀羅尼を展開し、利他に向かい衆生の教化を行う。『菩薩地』「菩提分品」の自利のための法陀羅尼と義陀羅尼とは明らかに異なる。すなわち、法陀羅尼と義陀羅尼の本来の意味は経典の句文およびその意味を覚えて記憶することであり、当然ながら自利である菩薩自身の修行にも、利他である衆生の教化のどちらにもその効力を発するが、「菩提分品」における法陀羅尼と義陀羅尼は菩薩自身の悟りの手段としての自利の陀羅尼と解してよいであろう。

呪陀羅尼は衆生の災厄を鎮めるために用いられ、衆生のための除災招福、現世利益を目的として用いられる利他の陀羅尼と解釈できる。ヒンドゥー教の影響を受けた初期密教の現世利益の陀羅尼と同じ雰囲気の中にあるが、後に成仏の陀羅尼へと変遷し、密教にとり重要な陀羅尼である。一つの問題は、この陀羅尼を唱えるだけで効力を発揮するものではないことである。生井 [1998]によれば、この呪陀羅尼の呪文そのものが力を持つわけではなく、言葉に真理の境地からの保証を与えることができないと述べている。すなわち、「悟った」菩薩の利他の誓願による加持力(adhiṣṭhāna)が必要である。これを實現するのが、後述する能得菩薩忍陀羅尼であり、それによる知的容認力の能得であり、「悟った」の意味がそこで明らかとなる。

最後に能得菩薩忍陀羅尼について考察する。修行する菩薩は知的容認力(kṣānti)を得るための呪句、たとえば *iṭi miṭi kiṭi bhi kṣānti-padāni svāhā* の意味を考え、これらは無意味なものであり、無意味性(nirarthatā)こそがこれらの意味であると悟る。この呪句は、初期密教の現世利益を説く経典（例えば、『孔雀経』）に出てくる意味のない呪句に似ており、ヒンドゥー教の影響を受けた初期密教的雰囲気を感じさせる。しかし、菩薩は最終的には、この呪陀羅尼により、不可言説の本性(nirabhilāpya-svabhāvatā)こそがこれらの本義であると悟り、菩薩の知的容認力を得る。

菩薩は能得菩薩忍陀羅尼により信解行地の知的容認力を得たとされる。信解行地とは、『菩薩地』十三住階位説に従うと「発心」に相当し、第三住・極歡喜住の手前である(平川 [1989])。『十地経』では極歡喜住は初地すなわち歡喜地であり、菩薩が能得菩薩忍陀羅尼により獲得するのは、初地手前の階位となり、菩薩の修行階梯としては初期

段階である。『十地經』では第七地で空、無相、無願を悟るが¹⁵、能得菩薩忍陀羅尼により得られるのは、それに比べると下位の行位である。しかし、従来の部派よりも利他を重視する大乘において、自利利他円満に向けて発心した菩薩は、利他行にも邁進する。さらなる『十地經』第七地にあるような高位の空の悟りは、次の段階と考えるべきであろう。能得菩薩忍陀羅尼と呪陀羅尼との関係を考えると、真実の言葉を衆生に加持し除災招福を行える力は、上述の議論を踏襲すると、初地手前の菩薩、すなわち初発心した菩薩が持ち得ることになる。

1.1.5 密教における陀羅尼

本稿では、便宜上密教を初期密教（雑密）・中期密教（純密）・後期密教と分類しているが、後期的大乗仏教と初期密教の間にはかなり重複する部分があり、厳密に区別することが難しい。最初期密教のほとんどの經典では、陀羅尼は現世利益・除災招福を求める呪文として用いられているが、初期密教の後代になると大乘仏教的な成仏を求める陀羅尼へと徐々に同化する。さらに、『初会金剛頂經』では、陀羅尼と真言と明呪を区別し、心の作用を統一させるのが陀羅尼であり、法性を解釈するものが「真言密呪」であり、有情の無明煩惱を除き無碍弁才を以て衆生を救う事業を「明呪」であると説いている。全体的に見れば、中期密教經典では、陀羅尼という用語がほとんど見られなくなり、呪文は真言(mantra)もしくは心呪(hṛdaya)と呼ばれ、最終的には真言に統一される。真言を「法爾」¹⁶として捉え、三密行の1つ（口密）に組み入れるなど、主眼点は現世利益ではなく、成仏思想になっていく。

緒言でも述べたように、本稿では初期密教における陀羅尼の変遷を議論する。すなわち、最初期（初期密教）のヒンドゥー化および（初期密教）後期における大乘思想への回帰（リターン現象）、さらに現世利益の陀羅尼が成仏の陀羅尼と同化していく過程を第2、3、4章で詳細に議論する。卒論の範囲を越えるため、中期密教には立ち入らないこととする。

1.1.6 おわりに

以上、簡単に陀羅尼の大乘仏教における変遷を見てきた。大乘仏教は利他に重点をおく、成仏思想として発展してきた。その中で、陀羅尼は經典の憶持・総持の特殊な方法として捉えられており、現世利益・除災招福の呪文はほとんど見出せない。『法華經』のように神秘的な呪文を含むものもあるが、これは後代の付加と考えられている。ただ、『菩薩地』に現れる四種陀羅尼のうち、第3の呪陀羅尼はこれを衆生に加持し、災患を

¹⁵ 大正蔵、Vol. 10, No. 287、『佛說十地經』、556a02-03、所謂善修空無相無願三摩地。而集廣大福德資糧

¹⁶ 存在や実践のあり方などが、おのずからそうであること。本来あるがままのすがたをいう。自然。天然。法然。（『精選版 日本国語大辞典』、講談社、2005、「法爾」）

除くものであり、第4の能得菩薩忍陀羅尼は呪文の意義を思惟し、その無意味性を理解するものである。このことは、これら2つの陀羅尼は後の「真言」を内に含み、密教に関係の深い陀羅尼であると考えられる。それを考慮し、自利・利他および菩薩修行の階梯の観点から、考察を加え検討した。その結果、種々ある陀羅尼もその意味や功德は、経典や時代により異なる使い方をされ、その変遷を考えるとときにそれぞれの陀羅尼の意味や役割の把握が重要であることが示唆された。

第2章 経典の変遷にみる初期密教の研究

2.1 はじめに

大乘仏教においては、多くの経典が解脱、成仏を求め、衆生の教化に向けた利他を説く。一方、初期密教の時代になると現世利益を説く経典が急激に増加する。大乘経典と初期密教経典にはその内容において、重なりも大きく、完全に切り分けることができるものではなく、複雑な変遷の過程を示す。そのような意味もあり、初期密教を日本では伝統的に「雑密」と呼ぶ。

大乘仏教から密教への展開を論じた研究は古くから多く存在している。例えば、中観・唯識・如来蔵といった大乘仏教の諸思想と密教儀礼の融会「大乘思想の儀軌化」(松長 [1996])と言う考えがある。インド文化や宗教儀礼そのものが、大乘仏教化して密教が形成された「インド儀礼の大乘仏教化」(生井 [1996])と言う視点からの研究もある。一方、インドにおけるタントリズムの傾向は仏教のみならず、一部のヒンドゥー教やジャイナ教をまきこんだ「汎インド的な文化現象」(森 [1997])と捉えるものもある。他方、小乗部派に伝承される護呪と一部の密教経典とのなかりを検討した「小乗仏教より密教への展開」(大塚 [2001])という論文もあり、現状ではまだ最終的な結論は得られていない。

2.1.1 大塚による初期密教研究

そのような、研究状況の中で大塚は初期密教の研究を系統的に行なっている[2013]。この章では、大塚の先行研究を基にして、初期密教における経典の変遷を、特に密教化という観点から概観してみる。まず、大塚は主に経典の精読から初期密教時代を読み解き、3つに区分している。

第1期:およそ3世紀前後のころより5世紀半ばころ(クシャーナ朝よりグプタ朝前期)。密教の萌芽とも呼べる経典の成立、次第に密教的色彩をおびた経典が形成される。非仏教的なインド古来の呪術や呪文信仰に根ざした守護と安寧を目的とした密教であり、インド社会のヒンドゥー化や部派仏教(根本説一切有部)の影響を受けている。

第2期:5世紀半ばより6世紀ころ(グプタ朝後期)。陀羅尼や呪文が中心であった第1期の密教より、印契・画像・マンダラなどを扱った儀軌が組織され、それまでの陀羅尼や呪文中心の密教に比較して一段高いレベルの密教的要素が登場してくる。

第3期:6世紀より7世紀半ばころ(グプタ朝末期よりポスト・グプタ朝時代)。密教者の新しい規範が作成されたり、悉地を得るための密教的な行法が整備される。行法に必須のマンダラや画像もより複雑化し、それらを用いた灌頂儀礼が、法王位の受職を意味するものに変化して、成仏をめざす密教儀軌として成立する。

この分類を行うには、まずは「経録」から訳出年代を知り、この「経録」をより所に、

さらに經典の精読から、新古を明らかにするのであるが、大塚はその基準をも明確に定めている。長くなるので本章の付録Iとして記載しておく。

このような方法論の特徴の1つとして、同系列の經典に、何世紀にも渡って類本が存在する場合、その変遷を系統的に読み解けることを挙げることができる。たとえば、『孔雀明』のような護呪經典には、四世紀以上にもわたって漢訳された類本が8本も存在する。これら類本の変遷を見ることにより、經典の変化やその中に現れる思想の変化を読み解くことができ、初期密教時代における大乘から密教への変遷を推察することができる。大塚は、護呪經典である『孔雀經』類本の変遷(大塚 [2004])および成仏經典¹⁷である呉支謙訳『無量門微密持經』とその類本の変遷(大塚 [2006])を詳しく読み解いている。後者で扱われる陀羅尼は、一種の悟りを求めるための陀羅尼であり、この時期の現世利益を求めるヒンドゥー的陀羅尼ではなく、大乘的である。その意味で、護呪經典である『孔雀經』とは対照的である。この2經典の系統は、類本が長期に渡り多数存在するため、經典の時代変遷を見るには最適の經典群である。以下では、これらの2系統の經典の変遷をまとめ、各經典においてどのように密教化が進んだのかを見ていく。

2.2 『無量門微密持經』および類本の変遷

2.2.1 はじめに

大塚は支謙訳『無量門微密持經』¹⁸が、最も初期の密教經典であり、インドの地において3世紀前後に成立したと論述している[2005]。ここでは『無量門微密持經』の類本に視点をあてるが、付録IIにみるように、支謙訳に始まり不空訳が訳出されるまでには、3世紀より8世紀までの長い時代の推移がある。この長い歴史の中で、類本がどのように密教化の展開をとげていくのかを調べている(大塚 [2006])。

2.2.2 『無量門微密持經』の構成

初訳である支謙訳『無量門微密持經』の内容を大雑把に概観する。初めに、仏陀が維耶離國(Vaishālī)における大樹の精舎に住しておられたと説かれ、集會が描かれたのち、菩薩のもつべき能力や功德が示される。中間に、本經典の中心となる菩薩の能力や功德を実現するための40の持(陀羅尼)要句と、目指すべき境界の「無量門微密持」が提示される。最後に、実践上の用心と具体的な行次第が明かされ、釈尊は、この「持(陀羅尼)」を行ずる菩薩に対しては、八大神(夜叉神)が守護し、必ず来ると説く。

非常に大乘的雰囲気にある經典であるが、本經が密教的であることについては、以下のように考えることができる(大塚 [2006])。同經の最終部分では、八夜叉と八菩薩の現前守護を期待して修する儀軌が説かれる。唯一、同經の中で大乘仏教の諸思想とは異なる部分といえば、この点に限られるのである。すなわち、同時代に存在した大乘經典

¹⁷ 本論文では、解脱・成仏を説く經典を成仏經典と呼ぶことにする。

¹⁸ 大正蔵、vol. 19、No. 1011

ではみな、修習者の専心する姿に諸天や鬼神が恩恵を与えるという文脈で守護が示されていた。言い換えれば、受動的である。ところが、同経の場合は八夜叉と八菩薩の現前守護を期待して修す儀軌は、どちらかといえば、修習者が守護を期待して能動的に期待して儀軌を修した結果なされるものなのである。つまり、儀軌を実践しなければ守護は得られず、儀軌の重要性が知れる。ここに、従来の初期大乘經典には見られない守護を目的とした儀軌が成立していたと見ることができる。

2.2.3 陀羅尼の密教的展開

次に各類本の中から、とくに密教化が見て取れる点を取り上げて、本経の中心的な役割をはたす「持要句(陀羅尼句)」において、その展開過程を明らかにしている。

持要句なる陀羅尼句について、典型的な発展過程を見るため、第1期には支謙訳『仏説無量門微密持経』一卷(訳出年代 A.D. 222~253)(以後、I 訳)と功德直共玄暢訳『無量門破魔陀羅尼経』一卷(訳出年代 A.D. 462)(以後、IV 訳)を取り上げ、第2期には闍那厠多訳『仏説一向出生菩薩経』一卷(訳出年代 A.D. 585~595)、闍那厠多訳『仏説一向出生菩薩経』一卷(訳出年代 A.D. 585~595)(以後、VII 訳)を、第3期には智厳重翻訳『出生無辺門陀紐尼経』一卷(訳出年代 A.D. 721)(以後、VIII 訳)を取り上げている。

<第1期>

最初に位置する I 訳と、最後の IV 訳を比較してみると、26 句にものぼる陀羅尼の増句が確認できる。IV 訳最後の句において、「沙波訶(svāhā)」なる句が付加されている。この svāhā 句は、後代の初期密教經典になるとよく見られる、真言陀羅尼の最後に添えられる句である。このことは、この第一期最後にあたる IV 訳原典が成立する時点において、陀羅尼の呪文化が始まったことを意味する。

<第2期>

第2期最後の VII 訳に記される陀羅尼句を見ると、IV 訳よりもさらに著しい増句が行われている。同時に、最後の「沙波訶(svāhā)」句が継承されている。

<第3期>

VIII 訳を見ると、新たな増加分を加えて、総数 101 陀羅尼句に展開している。さらに、二句目の「曇(om)」が増句されている。この VIII 訳において、「曇(om)」と「沙波訶(svāhā)」の二句が結合され、大乘的な陀羅尼の呪文化、すなわち真言陀羅尼化の完成とみることができると考えられている。

2.2.4 儀軌の密教化

次に類本の中から、密教化の著しい儀軌化を取り上げて、その展開過程を、「八大神(八夜叉神)の守護」を中心に検討している。

最初に I 訳の内容を概観してみると、仏陀釈尊は、雪山中に住する八大神(八夜叉神)がこの「持」を行ずる菩薩を見て守護すると説き、持行次第を説く。この持行次第を修

習した結果、八大神が菩薩の近くに来て守護するので、必ず誦行が安定すると説く。このような II 訳に説かれる守護を得るために修習される持行次第の構成は、次の仏陀跋陀羅訳(I 訳)や求那跋陀羅訳(III 訳)においても、ほぼ踏襲されている。

次に功德直訳(IV 訳)の持行次第に関しては、密教的な儀軌次第である図像作成、祈願、供養、作壇、作礼が挿入され、さらに陀羅尼が呪文化され遍数を限定して念誦されるようになるのが確認でき、密教化していく展開過程が見える。

ところが、第 2 期以降の類本には、まったくこのような密教的儀軌化が見られないのである。不思議なことである。大塚は、第 1 期 IV 訳の増広部分である密教儀軌が、第 2 期以降の經典には現れないも、後代の密教者にも何らかの方法で伝承されていたと推論している(大塚 [2006])。

2.2.5 おわりに

支謙の I 訳から、後代になるにつれて、次第に陀羅尼が増広されていく特徴が類本に見られた。第 1 期最後の IV 訳において、svāhā 句が付加されて、第 3 期最初の VIII 訳でさらに om 句(オーム)が付加されて完全に呪文化されていく。時代的には第 1 期の最後にあたる 5 世紀中葉ころより、第 3 期の始まる 6 世紀中葉にかけてのほぼ百年の間に、大乘的な陀羅尼が密教の真言陀羅尼へと呪文化していった過程が起こったと考えられる。一方、この陀羅尼句に基づく行体系が密教化(儀軌化)するのは、第 1 期最後の時代である 5 世紀初頭より中葉にかけての時代であった。この 2 点の時代を比較してみると、陀羅尼の呪文化と行体系の密教化という二つの動向が、ほぼ 5 世紀中葉のころで重なっている。この 5 世紀中葉の時代こそ、大乘から密教へと傾斜していく転換時代であったのではないだろうか。

2.3 『孔雀経』および類本の変遷

2.3.1 はじめに

大塚は、成仏經典である『無量門微密持経』とは異なり、護呪經典である『孔雀経』の類本を取り上げて、初期密教の中での經典の変遷を通して、初期密教の実態を鮮明にしている(大塚 [2004])。

2.3.2 『孔雀経』と類本の概要

まず『孔雀経』の類本を整理し、各類本の漢訳年代を推定している。その分類された類本リストは、本章の付録 III に示す。以下文中の○番号は、類本リストの經典に対応している。

『孔雀経』の類本は初期的特徴をもつ④⑤⑥¹⁹ 3 本のグループと、第 2 次的特徴をも

¹⁹ ⑥旭序羅什訳『孔雀王呪経』は、唐の西崇福寺の沙門智昇が編纂した経録である「開元録」(A.D.730)

つ②③①（ここでは、梵本、チベット訳は省いた）の3本のグループに大別することができる。まず、その概要をみる。

最古層に属する④については、巻頭部分では、ジャータカの『孔雀本生話』を要略した内容が述べられるところから始まる。その後、諸天等の呪を説き、持呪者の守護と長寿を祈願して終了する。

⑤の内容においては、④とはまったく異なる帰依文から始まる。帰依の後に、孔雀王呪経を説き、天龍以下の諸鬼神等に対し、持呪者が説く孔雀王呪を聞き従うよう要請する。次に孔雀呪に関する吉祥比丘の蛇毒被害の説話が説かれ、擁護の偈や他の多くの諸呪を説き、持呪者の擁護と長寿を要請する。『孔雀経』の本文としてはここで終わる。

次に、第二次的に増広した特徴をもつグループのうち、②③①はほぼ同じ構成をとるので、②僧伽婆羅訳『孔雀王呪経』を代表と捉え、これについて見る。まず、帰依文を説き、次に孔雀王呪を説くことによって、天龍以下の諸鬼神等に対し、持呪者を守護するよう要請する。次に⑤と同一の吉祥比丘の蛇毒被害の説話を説き、天龍以下の諸鬼神による災難等を取り除く結界呪を説く。次に一転して、④に同じ孔雀王呪のもう一方の因縁伝『孔雀本生話』を説き、大孔雀王呪を説く。次に「彼孔雀王有時」と再び孔雀王の説話が仏陀によって語られる。そして、あらゆる鬼神衆による恐怖から免れるとして、仏力や過去七仏の力に基づく呪文を説く。その後、諸鬼神に対する多くの呪等を説き守護を要請する。最後に、阿難が四衆に大孔雀呪を教示して、②が終了するのである。

類本を概観すると、『孔雀経』は④の原形孔雀経の成立から始まり、⑤へと展開して一応の初期『孔雀経』の体裁を整えたが、後代には②に見られるように、第2段階として守護を要請する。諸鬼神の数も、呪文の数も飛躍的に増広され、さらには儀軌化されて、密教化の度合いが強まっていったことが分かる。内容的に見れば、经文ならびに孔雀呪以下の諸呪文を唱えることによって、梵天以下の諸天や諸鬼神に守護を祈願し、持呪者や四衆が諸の災難から免れるよう祈念することを主目的にしている。そして最後には、儀軌を通じてその主目的を達成するように組織化され、密教化が進んでいるのが分かる。

2.3.3 『孔雀経』成立の理由

この変遷について、大塚は以下のようにまとめている。第1期にあたる④失訳は、構成内容の上からみると、ジャータカの『孔雀本生話』と、部派の護呪經典として権威ある āṭānāṭiya-suttanta の内容をミックスして、護呪經典としての骨格を整える一方、両典籍に説かれる護呪の偈文を採用せずに、根本有部律に収載される非仏教的・非アーリアン系呪文を増広・導入して、新たな密教護呪經典として編纂された実態がうかがえる。このことより、非アーリアン系の部族出身で根本有部律を伝持する者たちが古くから使

に近い時代に、④⑤両本を合わせて作られた中国撰述の偽経とみなされている(田久保 [1978])。

用していた非仏教的・非アーリアン系呪文を正式な形で唱え、守護を祈願したいという動機から、新たな護呪經典としての『孔雀經』を制作したのであろう。

第2期の時代に配当できる②になると、前半部分では、梵本『根本有部律藥事』から、起源の異なる二種の説話（吉祥比丘蛇毒被害と孔雀本生話）が結合されたストーリーを導入し、後半部分では、より忠実な内容を導入しながら大幅に増広され、さらに呪文の数も圧倒的に増広されるにいたっている。このことより、増広的『孔雀經』グループに属する3本の類本についても、やはり非アーリアン系の部族出身で根本有部律を伝持する者たちが行ったと思われる。最終的には、儀軌化をはかって密教經典として大成させていったのである。

第3期に配当できる①になると、經文の上では第2期の僧伽婆羅訖と構成内容において大きな増広が生じてはいないが、最後に儀軌が付加されて、密教經典として大成するにいたっている。このように同一類本の中でさえ、第1期より第3期にいたる間には、明確な増広と密教化の展開がうかがえる。

最初期密教の実態は、表層では修道の妨げになるような災いを除くことを目的とした部派の護呪經典や護呪を継承しながらも、底流ではヒンドゥーの民間信仰的な祈祷リズムを仏教内に持ち込み始めていた。まさに、仏教においてヒンドゥー化が進む実態が見えてきたと言える。

2.4 おわりに

ここでは、『無量門微密持經』と『孔雀明』のそれぞれの類本の変遷から、各經典において陀羅尼句の増広や儀軌化が進み、密教化することが明らかになった。また、『孔雀經』の成立より、非アーリアン系の部族出身で根本有部律を伝持する者たちの影響で經典の密教化が進んでいったことが示された。次章では、初期密教の時代の社会状況を見ることにより、經典変遷の背景を探ることにする。

付録 I. 大塚による初期密教經典の分類を行うための基準

(1) 初めに、「経録」をより所にして、最も初期の密教經典を選定する。

(2) 次の段階で、最初期の密教經典が大乘經典や小乗經典とは異なり、密教的な部分を含んで密教に傾斜していることを確認しなければならない。その場合、經典自体がどのような内容のもとに構成されているか、その全容を明らかにする必要がある。

次に、その經典のどの部分が密教的要素を含むのか鮮明にする必要がある。この作業をもって、最初期の密教經典と判断する。

(3) また、突如として最初期の密教經典が編纂されたわけではないであろうから、その經典が形成されるにいたった思想的背景を探り、どこから影響を受けて、その經典が編纂されたのか、密教の出発点となる經典の背景を把握することが重要である。

(4) 次に、その最初期の密教經典を出発点にして、初期密教がどのように形成され、展開されていったかを探る作業が必要であろう。その場合、最初期密教の一經典が時代を隔てて訳出された類本の中に、その展開過程を見いだすことがまず先決である。

次に、その展開過程をさまざまな他經典と比較して、類似する点や相違する点などを明確にした上で、初期密教における展開過程の全体的な動勢を浮彫にする。

(5) 最後に、各三期にわたって、その時代の核となる密教經典の実態を究明し、初期密教における形成と展開過程の全体像を究明する。

付録 II 『仏説無量門微密持經』漢訳類本の訳者と訳出年代

〈第一期：最初期密教時代(3世紀前後～5世紀中葉)〉

I 支謙訳『仏説無量門微密持經(No. 1011)』一卷(訳出年代 A.D. 222~253)

II 仏陀跋陀羅訳『仏説出生無量門持經(No. 1012)』一卷(訳出年代 A.D. 396~418)

III 求那跋陀羅訳『阿難陀目怛尼呵離陀經(No. 1013)』一卷(訳出年代 A.D. 435~453?)

IV 功德直共玄暢訳『無量門破魔陀羅尼經(No. 1014)』一卷(訳出年代 A.D. 462)

〈第二期：初期密教展開時代(5世紀中葉～6世紀中葉)〉

V 僧伽婆羅訳『舍利弗陀羅尼經(No.1016)』一卷(1 A.D. 506?)

VI 仏駄扇多訳『仏説阿難陀目怛尼呵離陀隣尼經(No. 1015)』一卷(訳出年代 A.D. 525~539)

VII 闍那厘多訳『仏説一向出生菩薩經(No. 1017)』一卷(訳出年代 A.D. 585~595)

〈第三期：初期密教確立時代(6世紀中葉～7世紀中葉)〉

VIII 智嚴重翻訳『出生無辺門陀紐尼經』一卷(訳出年代 A.D. 721)

IX 不空訳『出生無辺門陀羅尼經』一卷(訳出年代 A.D. 742~771)

付録 III 『孔雀經』漢訳類本の訳者と訳出年代

①唐不空訳『佛母大孔雀明王經(No.982)』三卷(漢訳年代 741-771)

②梁僧伽婆羅訳『孔雀王呪經(No. 984)』二卷(推定漢訳年代 A.D.518-524)

- ③唐義浄訳『佛説大孔雀呪王経(No.985)』三卷(漢訳年代 705)
- ④失訳『大金色孔雀王呪経(No.986)』一卷(西域沙門帛尸蜜多羅訳に比定、推定漢訳年代 A.D.317-322)
- ⑤失訳『佛説大金色孔雀王呪経(No.987)』一卷(西域沙門帛尸蜜多羅訳に比定、推定漢訳年代 A.D.317-322)
- ⑥姚秦鳩摩羅什訳(A.D.344-413)『孔雀王呪経 (No.988)』一卷(中国撰述による偽経と断定)

第3章 社会的状況から見るヒンドゥー化とリターン現象

3.1 はじめに

大塚の初期密教の分類における第1期、第2期においては、初期密教はインド古来の呪術や呪文信仰の台頭を経て仏教側から乖離し、ヒンドゥー教的色彩を帯びた実践体系を構築していくが、最終的にはその実践体系に大乘仏教の思想を導入し、仏教側に戻ってくる、といったリターン現象が起こっている。この変遷過程を考える上で、グプタ朝の成立、その政治的・社会的・民衆的・僧団的状况は非常に大きな意味を持つと考えられ、本章ではそれを見ていくことにする。

3.2 グプタ朝とインド社会にみるヒンドゥー化

グプタ朝は、古代インドにおいて、チャンドラグプター一世により西暦320年に建国され、それから550年頃まで、パータリプトラを都として栄えた王朝である(山崎[1994])。グプタ王家はマガダより興り、いわばインド古来の部族の流れをひく人たちである。伝統的なヒンドゥー文化を重視し、この意味では一種のリヴァイバル王朝といってよい。生活文化の面でもこの傾向は顕著で、グプタ諸王はほとんどが熱心なヒンドゥー教徒であり、ヒンドゥー教を国教としていたこともヒンドゥー化の大きな力であった。ヴェーダの価値は再認識され、バラモン色の濃いヒンドゥー儀礼が復活し、バラモンの言葉であるサンスクリット語が公用語とされた。仏教もこうした影響下に仏典をサンスクリットで書き始めている(奈良[1985])。第二代のサムドラグプタ王は、アシュヴァメーダ(馬祀祭)を盛大に行なっているし、灌頂儀礼を含む伝統的なヒンドゥー儀礼が復活した。世の中は大きくヒンドゥーに傾き、仏教においてもその流れを避けることはできず、現世利益を説くヒンドゥー的経典が多く出されたのである。

この状況で重要なことは、仏教、ジャイナ教そしてシーク教はヒンドゥー教の一派である、という一般認識が現代インドにはあることである(奈良[1985])。ブッダはヴィシュヌ神の第九番目の権化であることは歴史的な伝承であって、今でもそのまま受容されている。当時もナーランダ僧院がグプタ朝時代に設立されるなど、仏教が迫害されることはなく、庇護を受けたことも理解できよう。

仏教の独自性も考えておかねばならない。仏教において、信者は悟りを求め仏教を信じていたわけであり、死者儀礼や現世利益を願う儀礼は彼らに関係がないものであり、いわば「どうでもいい」ものであり、日常の社会生活を行なううえに必要な諸儀礼は旧来のヒンドゥー教の方式で行なっていた。これも仏教がヒンドゥー教の一派と考えられる一因であろう。元々の釈迦的発想はいかにして悟りを求めるかであるが、在家の信者にとり、それは必ずしも必要ではなく、現世利益を求める儀礼(もしくは日常生活を行なう儀礼)が大切であったと思われる。このようなことを考えると、仏教はカーストを中

核とするヒンドゥー世界の上に成立し、伝播されていったものであり、ヒンドゥー教の一派と考えるのも、あながち否定できない。

ここに示すように、インド古来の部族の流れをひく人たちのグプタ朝においては、ヒンドゥー教が国教と定められ、また仏教がヒンドゥー教の一派であると考えられていたため、儀礼を持たない仏教が特段破壊されることなくヒンドゥー教に取り入れられていったのである。また仏教側もバラモンの言葉であるサンスクリット語により、仏典を編集するなど時代の流れに対応していった面はある。

3.3 リターン現象

3.3.1 寄進碑銘中の願文

当時の仏教教団は経済的には在俗信者の寄進に支えられていたと考えられる。法顕(長沢 [1971: p. 55])はマトゥラー国の項の記述では、多くの寄進が行われ、僧団の経済的基盤は保たれていたと記載している。ここで注意を払うべきは、グプタ期の寄進の願文を見ると、現世利益的な功德と同時に仏果(成仏)の誓願が増えてくることである。実際、文献(静谷 [1979])を調査したところ、合計193の碑銘が収められているが、破損がひどく解読できないものも多い。読み取れる碑銘中に、願文に「解脱・成仏」に関連したものが含まれるのは47例、含まれないものが52例ある。残り94例は破損などの理由により読み取れないものである。これより、ほぼ半数の碑銘願文に「解脱・成仏」に関連したものが含まれていたと考えて良い。時代的に現世利益を求めるヒンドゥー的雰囲気が高まる中で、大乘的な利他の考えが社会に広がっていたようである。確かにこれは、大乘的な考え方であるが、「解脱」については、部派の影響と見られるのではないだろうか。実際、この時代の僧院では大乘と部派との区別はそれほど明確ではなかったと考えられている(ショペン [2000]、奈良 [1985])。以下、その影響を見てみよう。

3.3.2 部派仏教の影響

碑銘の寄進文、願文などから明らかであるが、土地、精舎、仏塔、仏像の寄進、崇拝は、特に大乘、小乗によって差があるものではない。では、僧院ではどうだったのであろうか。法顕(長沢 [1971])は各地に大乘学の寺、あるいは小乗学の寺のあったことをいう。同時に羅夷国(北西インドの一市らしい)とサンカシヤ、マトゥラーの地では大小兼学の寺のあることを記している。7世紀の玄奘(水谷 [1999])も同様の表現を用いている。彼らの記述を総合整理して、平川[1969]はインド国内(ならびに西域)において「大乘を学ぶ寺」24、「小乗を学ぶ寺」60、そして「大小兼学の寺」は15を数えるという。さらに法顕(長沢 [1971: p. 63])はサンカシヤの項で「……塔……に僧尼はほぼ千人ほどおり、みな食事を共にし、大小乗学を雑え学んでいる」と述べている。元来、伝統的部派の立場からするならば、自派の律に従って具足戒をうけ、布薩、自恣等の儀礼を共にする者のみが共住しうるのであって、他部派の者、ましてや大乘の出家者と共に

住めるはずがないのである(奈良 [1985])。すなわち、大乘の出家者といえども出家者としての行儀は伝統的な部派の律によっていたということになる。法顕は、さらにこの時代、つまり5世紀のはじめに、大乘・部派の差は崇拜対象の差でしかなかったことを示している。

このように見てくると、初期密教の時代(3世紀~7世紀)において、インドにおいて、部派と大乘の区別はあったにしても、大乘の出家者の行儀は伝統的な部派の律によっていたと思われ、同じ僧院で共住できるほどであった。そのような状況では、解脱を求める部派的な実践が行われ、リターン現象の一因になったことは容易に想像される。

3.3.3 経典にみるリターン現象

中期密教成立前夜の7世紀頃インドにおいて、伝統的な部派教団と民衆の救済をめざす大乘教団が併存していたことは上述の記述からも窺える。そのような両教団の中にも、人びとの病気や安楽を願って密教的な儀礼を行っていた初期の密教者がいたが、自らの修行が成就せず苦悶していたのである。その状況が『蘇婆呼童子請問經』²⁰から読み取れる(大塚 [2001])。本經では、蘇婆呼童子が金剛手菩薩に修行の不成就の原因と打開策を質問する。すると、金剛手はさまざまな密教者独自の規範や呪的儀礼といった方策を教示する。これが本經の流れであるが、多面において部派と大乘の思想が混在している特徴が認められる。経典内容から密教者たちの社会的状況、修行、思想を読み解き、リターン現象の1つの原因を明らかにしてみたい。

当時の密教者の思いとしては、この世にバラモンとかシュードラという生まれによる区別はないという無差別・平等の理念を持っていたであろう。しかし、社会状況から見ると、ヴァルナ体制のもとで、バラモンの聖典にもとづく社会通念に反発し、苦悩していたこと、そしてそのような状況を好転させる意味でも、不善を捨てて一心に善法を求めようとする求道態度が経典からうかがえる。

また、密教者の修行生活を見ると、諸々の規範からうかがえる本經の密教者たちが目指した修行生活は、解脱や菩提を求めて仏教の戒に従うかたわら、悉地成就を求めて苦行主義を貫いていた。しかし、「タテマエ」では仏教徒として戒を守って解脱や菩提を求める一方、「ホンネ」のところでは現世利益的な悉地を求めるという密教者の「ホンネ」と「タテマエ」の部分が見え隠れする。彼らの修行内容を見ると、解脱を求める部派的な実践、菩提心や慈悲にもとづく大乘の菩薩行のような密教儀礼、念誦法を基本とする密教修法、さらにはインド古来の呪法のごとき悉地成就法という、部派・大乘・密教・インド古来の呪法、といった複合的な修行形体の実態が見られる。思想的には、五蘊の無我を意図した空思想が説かれており、これによって、彼らが多分に部派的な思想基盤の上に立っていたと考えられる。その一方で、菩提心や慈悲をも強調する側面も見

²⁰ 大蔵經、vol. 18、No. 0895

られたが、それも発達した菩薩思想に裏打ちされたものではなく、彼らが大乘の菩薩思想を摂取して徐々に変革してゆく段階にあったのであろう。

以下、仮説ではあるが、本経の文脈の中に表れる密教修行者像は、ヒンドゥー社会の低階級ヴァルナに属していた者たちで、当初は声聞乗や独覺乗に所属していたが、時代の変化とともに、そこから密教へと身を転じたのであろう。「ホンネ」のところでは悉地を求めて呪術性に偏向するも、「タテマエ」では解脱や菩提を志求し続けており、これが最終的には仏教へのリターン現象へとつながったと予想される。

このように、初期密教期においては、極端なヒンドゥー化が進むものの、いくつかの要因により解脱・成仏を求める大乘的思想に戻ってくる様子が見えてくる。

3.4 おわりに

本章では、初期密教時代のインドの社会的状況を調べることにより、初期のヒンドゥー化及び後期の仏教へのリターン現象の背景を考察した。

インド古来の部族の流れをひく人たちのグプタ朝において、ヒンドゥー教が国教と定められたことなどにより、社会が大きくヒンドゥーに傾くが、仏教がヒンドゥー教の一派であると考えられていたことより、仏教が特段破壊されることなくヒンドゥー教に取り入れられていったのである。

しかし、グプタ期の仏教徒の寄進銘文の解析より、「現世利益」と「成仏、解脱」の誓願の併願がかなり多く、大乘思想が一般大衆に受け継がれて、生活に浸透していた様子を伺うことができるが、これがリターン現象の1つの要因となったと思われる。また、グプタ朝の密教徒の社会状況、修行、思想より、「ホンネ」のところでは悉地を求めてヒンドゥー的呪術性に偏向するも、「タテマエ」では解脱や菩提を志求し続けたことも、仏教へのリターン現象へとつながったのであろう。さらに、初期密教の時代（4世紀~7世紀）において、インドでは部派と大乘の区別はあったにしても、大乘の出家者の行儀は伝統的な部派の律によっていたと思われ、同じ僧院で共住できるほど近いものであり、解脱を求める部派的な実践がリターン現象の一因になったことも予想できた。

第4章 現世利益の陀羅尼から成仏の陀羅尼へ

4.1 はじめに

第2章および第3章では、大塚の研究を基に、初期密教経典の変化およびその背景にある社会的状況を見てきた。これまで、初期密教時代は大乗仏教と密教が混ざり合った過渡的な時期として扱われており、その時代における変遷はあまり系統的には扱われていなかった。その初期密教の時代を、経典の精読から明確な分類指針を示して、研究の方向性を示した大塚研究は高く評価できる。そこでは、経典の精読から初期密教の時代を3つに区分し、最初期には急激なヒンドゥー化が起こり、経典が現世利益一色となるが、その後密教化が進んでいく過程が見事に示された。

しかしながら、大塚研究では、現世利益の呪文(陀羅尼)が成仏の陀羅尼に変化していく過程については注目されていない。本章では、この問題に着目する。まず、松長の『密教経典成立史論』(松長 [1998])と氏家の『陀羅尼思想の研究』(氏家 [1987])を基に先学の研究を概観し、その後『孔雀経』とその類本における陀羅尼の変化について調べた。

4.2 松長有慶による研究

4.2.1 大乘経典における現世利益の呪文と成仏の陀羅尼の共存

現世利益の呪文(陀羅尼)が成仏の陀羅尼とどのように同化していくかを見ている。まず初期の代表的な大乘経典である『法華経』²¹を取り上げ、陀羅尼品二十六(総持品二十四)では、除災の陀羅尼呪が説かれていることを示す。また、普賢菩薩勸発品二十八には、『法華経』を受持する者が、普賢菩薩を見て歓喜し、三昧および陀羅尼を得ることが説かれる。ついで『法華経』を受持し、読誦し、書写する者に対して、非人の破壊より免れ、女人の惑乱を避けるために、陀羅尼呪が与えられる。要するに『法華経』の最後の普賢菩薩勸発品においては、正法の憶持としての陀羅尼と呪文化した陀羅尼が並んで説かれている。この陀羅尼呪を説く陀羅尼品とか普賢菩薩勸発品を含む後半部は、前半部の原形と目される諸品よりも成立が遅れるといわれ、したがって『法華経』の中に陀羅尼呪が説かれているからといって、初期の大乘経典の中に、陀羅尼呪が含まれているとは言えない、と注意を向けている。『大集経』六十巻においても同様のことが指摘されている(氏家 [1978])。このように、陀羅尼と呪文との結合は、最初期の大乘経典にみられず、少し遅れることが指摘されており、呪文と陀羅尼が結合し、同一視されるのは、初期の大乘仏教経典の形成期ではなく、それらの経典の付加部分においてであると述べている。

²¹ 大蔵経、Vol. 09、No. 0262

4.2.2 陀羅尼と呪文の同化過程

大乘經典と初期密教經典の区別はそれほど簡単ではなく、大正蔵の大乘經典と密教經典の区分にこだわらず大乘仏教經典の中から広く陀羅尼を拾い出し、憶持と除災との機能別に整理し、両者の関係の歴史的な変化を探っている。

4.2.2.1 成仏の陀羅尼を説く經典

『放光般若經』²²卷四、陀羅尼品二十(西晋の無羅叉訳、291年)、『大乘悲分陀利經』²³(三泰代失訳、350年–431年)、『賢愚經』²⁴(元魏の慧覺等訳、五世紀中葉)、『勝天王般若經』²⁵(陳の月婆首那訳、6世紀後半)さらに第3章で詳細に述べた『無量門微密持經』系統の一群の經典などにおいて、陀羅尼は主に仏教の基本的な教説を述べていることを示している。すなわち陀羅尼の受持によって、正覺への道を説き、除災招福・現世利益の機能とは無関係である。ただし、これらは例外であり、初期の密教經典の大部分は、これらのさまざまな災難から逃れるための呪文のみによって占められている。

4.2.2.2 一部分に除災を説く經典

確かに、密教經典のみならず、通常の大乘經典の中にも、除災のための呪文をいくつかりみいだすこともできる。大乘經典の中に、經典の大部分は通常のものとは変らないが、その一部分に除災の功德が強くあらわれているものもある。4世紀後半から5世紀の最初期ごろに西秦の聖堅によって訳された『無崖際總持法門經』²⁶と同人訳の『羅摩伽經』²⁷さらに一群の『梵天所問經』²⁸などであると指摘している。

4.2.2.3 増広で呪や陀羅尼を含む經典

一例をあげると、二世紀の中ごろ安世高訳になる『摩登女經』²⁹には呪がないが、三世紀はじめに訳された『摩登伽經』³⁰卷上では、外道の呪とともに仏陀の説いた護呪が現れる。一般的に言えば、後代に訳された經典ほど、呪、陀羅尼は長く、そして多くなっていく。

4.2.2.4 『菩薩地』の四種陀羅尼

第2章で述べたが、4世紀ごろに成立したと言われる『菩薩地』には、法陀羅尼、義陀羅尼、呪陀羅尼、能得菩薩忍陀羅尼の四種が述べられている。そのうち法陀羅尼とは、經典をつねに持して忘れないこと、義陀羅尼とは、經典の意味をつねに持して忘れないことで、いずれも陀羅尼のもつ念力と智恵の力によるためである。能得菩薩忍陀羅尼とは、菩薩の悟り、智恵の獲得のための陀羅尼である。呪陀羅尼は三昧を自在になす力に

²² 大正蔵、Vol. 08、No. 0221

²³ 大正蔵、Vol. 03、No. 0158

²⁴ 大正蔵、Vol. 04、No. 0202

²⁵ 大正蔵、Vol. 08、No. 0231

²⁶ 大正蔵、Vol. 21、No. 1342

²⁷ 大正蔵、Vol. 10、No. 0294

²⁸ 大正蔵、Vol. 15、No. 0585、586、587

²⁹ 大正蔵、Vol. 14、No. 0551

³⁰ 大正蔵、Vol. 20、No. 1300

よって災を除く陀羅尼であり、いわゆる現世利益の陀羅尼が入ってきているのは特筆すべきである。大乘經典にも、4世紀ごろには明らかに現世利益の呪文(陀羅尼)が認識されるのである。

これまで示したように、憶持の陀羅尼と除災の呪文(陀羅尼)は、大乘經典にそれぞれ別個に、あるいは同一經典の中に並んであらわれる。しかし密教經典の中では数の上から除災を目的とする呪法の經典が圧倒的に多く、『無量門微密持經』など2-3の例外を除けば、陀羅尼の読誦の功德として、仏法の憶持、仏智の獲得が經典中に説かれているとしても、それは經典全体からみると、ほんの一部であり、全体の調子は除災經典を出ないものが少なくない。このように、初期の密教經典のほとんどは、呪法の經典ともいえるであろう。仏教の基本的な教説を正面きって取り上げた經典はほとんど見当たらない。それにもかかわらず、よく知られたように、『大日經』³¹『初会金剛頂經』³²など7世紀の後半期ごろに成立したと目される中期の密教經典では、除災と同様に、ときにはそれ以上に、成仏の問題が中心となって、組織的な儀礼と修法体系が構成されている。この急激な変化を明らかにするために、七世紀の前半期のインド密教の趨勢を探る必要があるが、ここでは本卒業論文の範囲を超えるので、次の機会に譲ることとする。

4.3 氏家覺勝による研究

4.3.1 研究方針

氏家は特に初期密教經典(初期の陀羅尼經典、雜密經典)に着目し、そこに展開されている現世利益の呪文(陀羅尼)と成仏の陀羅尼に注目している。研究の基本的な考えは、以下のようなものである。松長[1998]が示したように、初期の大乘經典では現世利益の呪文(陀羅尼)と憶持・總持の陀羅尼が別に説かれているということを考慮して、(1)初期の雜密經典では、作仏・正覺(解脱)を目的とする陀羅尼と、現世利益を目的とする呪文(神呪:現世利益の陀羅尼)とは別々に説かれていた、(2)別々に説かれていた陀羅尼と呪文(神呪)とは、のちに同化して両者は区別がつかなくなるが、同化したがゆえに現世利益の陀羅尼にも作仏の目的が加えられるにいたった。

4.3.2 初期密教經典における同化過程

4.3.2.1 成仏・現世利益陀羅尼が独立の經典と準同化經典

初期密教經典のなかでも最初期に属するものとして、『安宅神呪經』³³と『無量門微密持經』とその類本を取り上げる。最初期のこれらの經典では、成仏の陀羅尼と現世利益の呪文は相互に関係をもっていない。

³¹ 大正蔵、Vol. 18、No. 0848

³² 大正蔵、Vol. 18、No. 0865

³³ 大正蔵、Vol. 14、No. 0427

次に訳出年代が3世紀中頃と考えられる『八吉祥神呪経』³⁴、『華積陀羅尼神呪経』³⁵、『持句神呪経』³⁶の3つの経典を比べている。これらは基本的には成仏の陀羅尼と現世利益の呪文は別々のものとして説かれているが、『華積陀羅尼神呪経』という経題に見られるように両者は準同化し、その後同一視されていったのであろう。「陀羅尼のための句」が呪文（神呪）と同化することによって、陀羅尼そのものも呪文（神呪）化されたのであろう。

4.3.2.2 同化過渡期の経典

東晋失訳の『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』³⁷では、過去七仏と八菩薩それぞれ別個に、呪文と礼仏作法およびその功德を述べる。神呪（呪文）を陀羅尼と呼び、憶持の陀羅尼は憶持と訳され、同じ陀羅尼が内容によって区別されている。また、梁代失訳の『虚空蔵菩薩七仏陀羅尼経』³⁸でも、過去七仏の陀羅尼神呪とその功德を賛美し、神呪（呪文）の法爾不變性を強調している。神呪の読誦によって過去仏の見仏を行うが、その見仏が陀羅尼と関係しているかどうかは分からない。このように、陀羅尼と神呪（呪文）の区別が定かでなくなる。5世紀頃の一部の訳経では、陀羅尼と呪文の区別が薄れることがわかる。成仏の陀羅尼と現世利益の呪文が同化する過渡期の経典であろう。

4.3.2.3 同化した経典

随の闍那崛多訳の『大法炬陀羅尼経』³⁹や『大威徳陀羅尼経』⁴⁰になると完全に陀羅尼の呪文（神呪）化は起こっている。ここでは、「大威徳陀羅尼」は「修多羅句陀羅尼法本」といわれ、大乘経典のエッセンスである真言と考えられているようである。この2経典は陀羅尼にもとづいて大乘の諸教説を総括する大部の経典であるが、陀羅尼と呪文（神呪）の区別が不明瞭であり、同化が認められる。

このように、6世紀以前の雑密経典の成仏の陀羅尼と現世利益の呪文は別説されていて、のちにこの両者は種々の理由で同化したと思われる。そして、同化したがゆえに、のちの呪文は陀羅尼のもっていた作仏正覚の内容と目的を合せもつ複合的な性格を帯びていったのであろう。このような同化の理由について、氏家は次のように考えている（氏家 [1987]）。陀羅尼は元来、法を記憶する力であるが、誰にでもできるものではない。それに代わるものとして、一字真言のようなものが考えられたのではないか。それは特殊な陀羅尼の一般化であり、複合的性格の強い陀羅尼を吸収して真言陀羅尼へと変化し、その後、中期密教の時代において、整理・組織化されていったのであろう、とま

³⁴ 大正蔵、Vol. 21、No. 1394

³⁵ 大正蔵、Vol. 21、No. 1356

³⁶ 大正蔵、Vol. 21、No. 1351

³⁷ 大正蔵、Vol. 21、No. 1332

³⁸ 大正蔵、Vol. 21、No. 1333『虚空蔵菩薩（問）七仏陀羅尼（呪）経』と記載

³⁹ 大正蔵、Vol. 21、No. 1340

⁴⁰ 大正蔵、Vol. 21、No. 1341

とめている。中期密教におけるこの動きについては、次の機会に論じたいと思う。

ここまで、松長と氏家の先行研究を基に、現世利益の陀羅尼と成仏の陀羅尼の同化について、いくつかの経典を年代順に見てきた。もし、同一の経典の類本にこの同化を見出せれば、より直接的な検証ができるのではないだろうか。このような考えのもと、大塚が密教化を詳細に検討している護呪経典である『孔雀経』とその類本について、陀羅尼の変遷を見ることにする。

4.4 『孔雀経』における陀羅尼の変遷

4.4.1 調査方法と結果

第2章で密教化過程について論じた護呪経典である『孔雀経』類本①、②、③、④、⑤（第2章 付録 III を参照）について、SAT 大正新修大蔵経テキストデータベース⁴¹を用いて（⑦⑧は SAT にはなく対象外である）、煩惱にあたる「三毒」をキーワードとして検索することにより、大孔雀明王の呪文が煩惱を取り除く呪（すなわち、成仏を狙う呪文）となる過程を調べた。その結果、大孔雀明王の呪文が三毒を消すための呪文として、説かれている経典とそうでない経典を見出した。

注目すべきことは、大塚により最初期密教の時代に含まれる『孔雀経』として分類される④、⑤の経典には「三毒」の記述がないが、「第二次的に増広した（後代の）孔雀経」②、③、①には「三毒」が見出されたことであった。すなわち、最初期の『孔雀経』では、大孔雀明王の呪文が煩惱を取り除く呪（成仏の呪文）として用いられていないが、「第二次的に増広した『孔雀経』」では成仏の呪文となることを示唆する。言い換えると、現世利益の呪文が煩惱を取り除く成仏の呪文（陀羅尼）となった瞬間であろう。

他の成仏の呪文（陀羅尼）が説かれていないかどうかについては、④、⑤の経典について原文を読み確認したが、見出すことはできなかった。以下、最後期の『孔雀経』である不空訳『仏母大孔雀明王経』について、対応部分について試訳を提示し、内容を確認する。

4.4.2 不空訳『仏母大孔雀明王経』の対応部分の内容確認

不空訳『仏母大孔雀明王経』の原文⁴²を以下に示す。

阿難陀此佛母大孔雀明王纔憶念者。能除恐怖怨敵一切厄難。何況具足讀誦受持必獲安樂

阿難陀此摩訶摩瑜利佛母明王。是能除災禍息怨敵者。爲欲守護四衆苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦離諸怖畏故復說眞言曰 怛隤也^{二合}佉^{引一}野嚩底^{二駄}引頼^{三駄}囉枳^{四矩}嚩覩嚩
銘五娑嚩^{二合}引賀^{引六}

⁴¹ <https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php> (2023.12.15)

⁴² 大正蔵、vol.19、No.0982、439a5-29

貪欲瞋恚癡	是世間三毒
諸佛皆已斷	實語毒消除
貪欲瞋恚癡	是世間三毒
達磨皆已斷	實語毒消除
貪欲瞋恚癡	是世間三毒
僧伽皆已斷	實語毒消除
一切諸世尊	有大威神力
羅漢具名稱	除毒令安隱
我等并眷屬	常得離災厄
願佛母明王	令一切安隱

爾時具壽阿難陀。聞佛世尊說是經已。頂禮雙足右繞三匝。承佛聖旨往莎底苾芻所。便以此佛母大孔雀明王法。爲彼苾芻而作救護。結其地界結方隅界。攝受饒益除其苦惱。時莎底苾芻苦毒消散。身得安隱從地而起。與具壽阿難陀俱詣佛所。禮雙足已在一面住。

以下に試訳を示すが、その際、塚本の和訳[1923]および梵本からの岩本の和訳[1975]を参照した。

アーナンダよ、この佛母大孔雀明王〔の呪文〕を僅かでも記憶（*smaraṇa）すれば、恐怖や怨敵といった一切の厄難を除くことができる。〔この陀羅尼全文を〕完備、読誦、受持すれば、必ず安樂を獲得することは言うまでもない。

アーナンダよ、この摩訶摩瑜利佛母明王〔の呪文〕、これは災禍を除き、怨敵を鎮めることができるものである。四衆である比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を守護し、諸々の怖畏を離れるために、さらに真言を説いて言うことには、

タドヤター ヤーヴァティ ダーヴァティ バラキ クル トウル メー スヴァーハー（*tadyathā yāvati dhāvati balaki kuru tulu me svāhā）。

貪欲と瞋恚と愚癡、これらは世間における三毒である。諸仏は皆〔毒を〕断ち切っており、〔仏という〕真実によって毒は消し去られる。

貪欲と瞋恚と愚癡、これらは世間における三毒である。経法は皆〔毒を〕断ち切っており、〔経法という〕真実によって毒は消し去られる。

貪欲と瞋恚と愚癡、これらは世間における三毒である。僧団は皆〔毒を〕断ち切っており、〔僧団という〕真実によって毒は消し去られる。

一切の世尊たちは大威神力を有し、阿羅漢は名声を備えることによって、毒を除き、安穩にさせる。

私たちと〔私たちの〕随伴者は常に災厄を離れた。願わくは佛母明王〔の呪文〕があらゆる者を安穩にさせますように。

さて、長老アーナンダは、仏世尊がこの経をお説きになったことを聴聞したのち、〔仏の〕両足に頂礼し、右繞三匝⁴³した。仏による聖教の趣旨を承受して、スヴァーティ (Svāti) 比丘のところへ行き、そしてこの仏母大孔雀明王の法によって、その比丘を救護した。〔すなわち、〕その土地を結界し、〔四〕方を結界し、〔その比丘を〕救助 (*parigraha) し、介抱 (*paripāla、饒益) し、彼の苦悩を除いた。その時に、スヴァーティ比丘は、苦なる毒が消散し、〔彼の〕身体が安穩を得て、〔臥していた〕地面から起き上がった。長老アーナンダと共に仏のもとへ詣でて、〔仏の〕両足に頂礼したのち、〔仏の〕傍らに坐した (*ekānte niṣaṇṇau)。

上述のように、災禍を除き、怨敵を鎮め、四衆である比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を守護し、諸々の怖畏を離れるために、摩訶摩瑜利佛母明王〔の呪文〕を説くわけであるが、その直後に偈頌が示され、三毒である貪欲と瞋恚と愚癡（貪瞋痴）が、仏、法、僧（仏法僧）の真実により消し去られると述べている。まさに、煩惱を捨てるための成仏の呪文(陀羅尼)を説いているのである。

4.4.3 現世利益の呪文が成仏の呪文となる時

ここにみる現世利益と成仏の陀羅尼の同化は、至って明確である。元々蛇毒を消すための呪文(陀羅尼)が、悟りの障りとなる三毒(貪瞋痴)を消すための陀羅尼となる。

『孔雀経』で古層のうちで新しいとされるのは、大塚によると⑤失訳『佛説大金色孔雀王呪経 (No.987)』一卷(西域沙門帛尸蜜多羅訳に比定、推定漢訳年代 A.D.317-322)である。それに対して、大塚のいう「第二次的に増広した孔雀経②③①⑦⑧本」中では、②梁僧伽婆羅訳『孔雀王呪経(No. 984)』二卷(推定漢訳年代 A.D.518-524)が最も古い。あくまでも推論であるが、この陀羅尼の変化は⑤訳と②訳の間ぐらい、すなわち、5世紀ぐらいに起こったのではないだろうか。このことは、第2章で述べたように、大塚が言う「陀羅尼の呪文化と行体系の密教化という2つの動向が、ほぼ5世紀中葉のころで重なっている。この5世紀中葉の時代こそ、大乘から密教へと傾斜していく転換時代であったのではないだろうか」といみじくも対応する。

日本では一番よく知られている不空訳『佛母大孔雀明王経』(No.982)に三毒を消すための呪文(陀羅尼)が記載されている。よって、web記事、宗門のホームページなどにもこの記述はみられる⁴⁴。しかし、不思議なことに、この蛇毒を消す陀羅尼が三毒を消

⁴³ 語注：礼式の一つで、仏に対して右回りに3回まわること

⁴⁴ ウィキペディア、フリー百科事典、「孔雀明王」<https://ja.wikipedia.org/wiki/孔雀明王>, 浄土宗、浄土宗新聞、<https://jodo.or.jp/newspaper/special/2229/>

す陀羅尼に同化していく過程についての研究は、少なくとも私の知る限り存在しない。最古層の『孔雀経』④、⑤にはこの三毒を消す陀羅尼は含まれておらず、また研究の歴史を見ると、宮坂[1979]以前の先行研究は、いずれも大塚の言う「第二次的に増広した孔雀経②③①⑦⑧本」に視点を当てたものであった。単なる推測であるが、宮坂[1979]や田久保[1978]にいたって初めて、視点が初期『孔雀経』④、⑤にも及ぶようになったためではないだろうか。

4.5 おわりに

これまで、現世利益から成仏の呪文(陀羅尼)への変遷の理解にはいくつかある。例えば、悟ったものの言葉は聖なる言葉であり、どのような呪文を唱えても、それは成仏につながる、というような解釈があった。また、上に述べたように、松長、氏家は、大乘経典の一部や最初期の密典において、成仏または解脱を目的とする陀羅尼と現世利益を目的とする呪文(神呪)とは別々に説かれていたが、この別々に説かれていた陀羅尼と神呪とはやがて同化して両者は区別がつかなくなる。同化したがゆえに呪文(神呪)にも陀羅尼が持っていた成仏の目的が加えられるようになった、と推定した。

ここで示した『孔雀経』類本に見られる「蛇毒を消し去る大孔雀明王の呪文が、煩惱である三毒を消し去る呪文となる」の例はより具体的な現世利益から成仏の呪文への変化であろう。ただ、これは一例に過ぎず、他の現世利益の呪文が、どのようにして成仏の呪文に発展して行くかについては、まだまだ詳細な研究が必要であると思われる。

まとめ

最後に本卒論のまとめと今後の課題について述べる。

卒論を始める際にテーマとして、除災招福や現世利益を願う呪文がどのような過程で真言密教の成仏の真言陀羅尼に変遷してきたかの解明を選んだ。しかし、卒論で扱うには大きすぎるテーマであり、まずは初期大乘仏教から『菩薩地』までの陀羅尼の変遷に焦点を当て、『菩薩地』四種陀羅尼の思想的背景を考察した。しかし、その後卒論の範囲を初期密教まで広げることにした。初期密教の研究については、これまでは大乘仏教と密教が複雑に入り混じった過渡的な時代として「雑密」として扱われてきたが、大塚は經典の精読から初期密教を3期に区分し、これまでより初期密教を系統的に扱う研究方針を示している。この研究を基盤として、大乘仏教から初期密教において、現世利益の呪文がどのようにして成仏の陀羅尼に同化していくかを検討した。テーマは大きなものであり、本論文で端緒についたばかりと言わねばならないが、その内容をここでまとめておく。

第1章では、先学たちのこれまでの大乘仏教における陀羅尼の研究を概観した。そこでは、まず初期仏教における明呪、護呪や真実語の信仰に触れ、仏陀の呪術の禁止とその後の人々の心情を考慮した善呪の許可について述べた。その後、大乘仏教における陀羅尼の変遷を、代表的な大乘經論『小品般若經』、『大品般若經』、『法華經』、『華嚴經』、『大智度論』、『菩薩地』に沿って、各經論の陀羅尼研究を概観した。その中でまとまった形で陀羅尼が述べられる『菩薩地』四種陀羅尼、すなわち、法陀羅尼、義陀羅尼、呪陀羅尼、能得菩薩忍陀羅尼について、自利・利他および菩薩の階梯の観点からその意味付けを考察した。

第2章では、初期密教における陀羅尼の変遷を読み解く基盤を得るために、大塚研究を基に初期密教期における經典の密教化の過程を、成仏經典である『無量門微密持經』および護呪經典である『孔雀經』のそれぞれの類本について、陀羅尼の増広・形式の進展や儀軌化の過程に焦点を当て調べた。『孔雀經』については、非アーリアン系の部族出身で根本有部律を伝持する者たちが増広を進め、儀軌化をはかって密教經典として大成させていったと推察された。

第3章では經典の密教化の背後にある当時の社会的状況等について検討し、最初期密教期のヒンドゥー化および後期の仏教へのリターン現象の背景を考察した。インド古来の部族の流れをひく人たちのグプタ朝において、ヒンドゥー教が国教と定められたことなどにより、社会は大きくヒンドゥーに傾くが、仏教はヒンドゥー教の一派であると考えられていたことより、特段破壊されるはなかった。また、リターン現象については、仏教徒の寄進銘文より大乘思想が一般大衆に受け継がれていたこと、グプタ朝の密教徒が「ホンネ」ではヒンドゥー的呪術性に偏向するも「タテマエ」では解脱や菩提を求めたこと、

部派と大乘の区別が少ない当時の状況で解脱を求める部派的実践が行われていたこと、これらがリターン現象の要因になったと推察した。

前章までの研究では、初期密教經典における陀羅尼の増広や儀軌化を中心にみたが、本卒論の主題である陀羅尼の変遷、すなわち、現世利益の陀羅尼がどのように成仏の陀羅尼に変遷していくのかについては、あまり明確ではなかった。よって、第4章では、現世利益と成仏の陀羅尼の同化がどのように進んでいくのかについて、松長、氏家の先行研究を基にして概観した。さらに、同一の經典の類本に同化を見出せれば、より直接的な検証ができるのではないだろうか、との考えのもと、大塚が密教化を詳細に検討している護呪經典である『孔雀經』類本について、陀羅尼の変遷を見た。その結果、最初期の『孔雀經』では、大孔雀明王の呪文が煩惱を取り除く呪(成仏の陀羅尼)として用いられていないが、後代のものには成仏の呪文(成仏の陀羅尼)として用いられていることを見出した。言い換えると、現世利益の陀羅尼が煩惱を取り除き、成仏の陀羅尼となった瞬間であろう。

さらなる今後の課題は明白である。本卒論では、大乘仏教から初期密教における陀羅尼の変遷過程を見てきた。すなわち、3世紀初めに急激なヒンドゥー化が起こり現世利益を説く經典が急増加し、經典の密教化が進むが、最終的には大乘仏教の思想を導入し、仏教側に戻ってくる。陀羅尼に注目してみると、最初期においては、ほとんどが現世利益を説く呪文(陀羅尼)であったものが、時代が進むにつれて、成仏の陀羅尼との同化が起こり、現世利益の呪文(陀羅尼)にも成仏の目的が付加されるという過程を不完全ではあるが見てきた。しかし、よく知られているように中期密教に入ると、ほとんどが成仏を説く真言陀羅尼となり、『初会金剛頂經』に至っては、陀羅尼という言葉がほとんど使われなくなる。このような中期密教における陀羅尼の変化については、これからの課題である。ぜひ、そのような研究が行える機会があることを願っている。

参考文献

大塚伸夫

- [2001]「『蘇婆呼童子請問經』に見られる初期密教修行者像について」、『密教学研究』第 33 号、pp. 37-74
- [2004]「最初期密教の実態－「孔雀明王經」を中心として－」、『大正大学研究紀要』、第 89 号、pp. 284-308
- [2005]「インド最初期密教の経腹について」（遠藤祐純先生・吉田宏哲先生古稀記念）『慈悲と智慧の世界』、『智山学報第』54 輯、pp. 61-75
- [2006]「『無量門微密持經』における密教的展開について」、『高野山大学密教文化研究所紀要』、第 19 号、pp. 1-113
- [2013]『インド初期密教成立過程の研究』、春秋社

平川彰

- [1969]『初期大乘仏教の研究』、春秋社
- [1979]「秘密仏教」、『インド仏教史』下巻、春秋社、pp. 303-342
- [1989]「初期大乘における陀羅尼の意味」、平川彰著作集『初期大乘仏教の研究 I』第 3 章、春秋社、pp.337-356
- [1989]「菩薩の修行の階位」、平川彰著作集『初期大乘仏教の研究 I』第 4 章、春秋社、pp. 399-564

梶尾祥雲

- [1982]「真言陀羅尼の研究」、『梶尾祥雲全集』、第 4 巻、臨川書店、pp. 429-468

頼富本宏

- [1989]「陀羅尼の展開と機能」、『インド仏教 3』、岩波講座東洋思想 10、岩波書店、pp. 315-339

氏家覚勝

- [1978]「大集經におけるダーラーニー説」、『印度學佛教學研究』通号 199852、pp. 104-111
- [1984]『陀羅尼の世界』、東方出版
- [1987]『陀羅尼思想の研究』、東方出版

生井智紹

- [1996]「真言門より行を行ずる菩薩－大乘仏教における密教の形成過程という観点から－」『高野山大学論文集』、高野山大学、pp. 163-180
- [1998]「『華嚴經』における陀羅尼」、『密教学研究』30、pp. 15-32

北條賢三

- [1998]「陀羅尼理論形成の思想的考察」、『山崎泰廣教授古稀記念論文集』、永田文昌堂、pp. 31-63

松長有慶

[1996]「呪法の仏教化ーインド密教の展開との関連を中心にー」、『高野山大学論文集』、高野山大学、pp. 1-16

[1998]『密教經典成立史論』、松長有慶著作集第一巻、法蔵館、pp. 83-114

森雅秀

[1997]『マンダラの密教儀礼』、春秋社

梶山雄一

[1979]「仏教タントリズムにおける言葉の問題」、『密教学研究』11、pp. 331-350

金成哲

[2007]「瑜伽行派の修行道における利他行の問題」、龍谷大学『研究員報告』、p. 31-46

相馬一意

[1987]「梵文和訳「菩薩地」(2)ー自利・利他の章ー」、『仏教学研究』43、p. 504-527

田久保周誉

[1978]「初期孔雀経類とその大乘的展開」、『豊山教学大会紀要』、第6号、pp. 1-31

山崎元一

[1994]「グプタ朝」、『日本大百科全書(ジャポニカ)』、小学館

奈良康明

[1985]「インド社会と大乘仏教」、『大乘仏教とその周辺』、講座・大乘仏教 10、春秋社、pp. 35-80

長沢和俊 訳注

[1971]『法顕伝・宋雲行紀』、平凡社、東洋選書 194

水谷真成 訳注

[1999]『大唐西域記 1-3』、東洋文庫

静谷正雄

[1979]『インド仏教碑銘目録』、平楽寺書店

ショペン グレゴリー

[2000] 小谷 信千代 訳、『大乘仏教興起時代 インドの僧院生活』、春秋社

宮坂宥勝

[1979]「過去七仏の系譜ーāṭṭhāpiya rakkhā を中心としてー」、『高野山大学論業』第5、pp. 1-24

塚本賢暁

[1923]『国訳密教: 経軌』第5巻、国訳密教刊行会、pp. 275-279

岩本裕

[1975]『孔雀明王経 (マハー・マーユリー陀羅尼)』、仏教聖典選 第7巻 (密教經典)、読売新聞社、pp. 267-268

謝辞

本卒業論文は、2020 年 4 月より 2024 年 3 月まで高野山大学文学部密教学科（社会人コース）に在籍した間に行った研究をまとめたものである。

指導教員として、卒業論文のテーマ設定の時から仏教についての広い知識と柔軟な発想でご指導いただいた高野山大学教授 土居夏樹先生に感謝する。非常に広い視野でご指導いただいた高野山大学准教授 櫻木潤先生に感謝する。テーマ設定、文献の紹介から始まり、何も知らない著者に丁寧に仏教学のいろはから直接ご指導いただいた高野山大学非常勤講師 岡田英作先生（愛媛大学特定助教）に心から謝意を表す。

2022 年 11 月にインド研修旅行に参加したが、丁寧な準備とご指導を受けた高野山大学名誉教授 奥山直司先生に感謝する。その他、授業をはじめとして、数々の面でご指導を賜った高野山大学のすべての教員の方々、さらには日々の大学生活で種々お世話になった高野山大学難波サテライトの若松敏幸さんを始めとする事務の方々に感謝を表す。

社会人コースということもあり、色々な年齢と経歴の方がおられ、多くの刺激と励ましと学習の助けをいただいたことは大きな喜びであった。特に、同年度密教学科入学の水野基子さん、当麻登三治さん、大谷勝己さん、徳山恵子さんには、特段の謝意を表したい。一学年上級の坂元実津穂さん、脇田尉予さん、清水聖子さん、壺井陽子さんには勉学の面で特にお世話になった。1 学年下級の加藤賢一さん、福田峰子さん、2 学年下級の力石卓朗さん、松本信子さん、徳山里美さん、福井悦子さんのおかげで充実した学生生活を送ることができ、感謝する。

最後になるが、退職後高野山大学入学を勧めてくれ、勉学を見守ってくれた妻、金谷和子には心よりお礼を言いたい。

2024 年 1 月

金谷利治